パフォーミングアーツ

国際芸術祭「あいち2022」のパフォーミングアーツでは、演劇・ダンス・音楽といった従来の舞台芸術に加え、これまで現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートにも注目します。とりわけ1960年代以後に花開いたパフォーマンス・アートが、既存の表現形式やジャンルを乗り越える芸術的探究から誕生した歴史へのオマージュとして、領域横断性と実験性に富んだプログラムを展開します。現代美術展参加作家によるパフォーマンスや、パフォーミングアーツ参加作家によるパフォーマティヴな展示などが相互に響き合い、会期を通じて芸術祭にダイナミズムを作り出します。

具体的には以下の3つの特徴のもと、愛知県芸術劇場を中心とした会場で展開します。

歴史的なパフォーマンスを「再演」することで現代を捉え直す

フルクサス、実験音楽、舞踏など、20世紀の芸術史を更新した数々の前衛芸術。それらの代表的なパフォーマンスや行為、思想を現代に「再演」ないし「再解釈」することで、歴史から現在を照射します。また、実際の上演には立ち会っていない多くの観客が、歴史を学び現代との接続を楽しむためのツールとして、レクチャーやトークなどを企画します。

VRなど最新のテクノロジーによって「パフォーマンス」の領域を拡張する

パフォーマンスを構成する身体の動きや身振り、声、ナラティブ、音、映像など時間的な要素に加え、VRなど最新のテクノロジーを駆使し、パフォーマンスの領域を拡張する新たな創作に取り組みます。仮想と現実が交錯する地点に生成する、未知の体感を探究します。

コロナ禍を経て、生とケアをめぐる問いを開く

長期化するパンデミックで個々の身体に関する状況が激変する中、身体に立脚する表現においても、生や生存をめぐる様々な問いが生まれているはずです。健常者と障害者、ケアする者とされる者など、近代的な価値観で引かれた境界線を揺さぶり、身体をめぐる新たな倫理を模索するアーティストの挑戦に立ち会います。

参考資料
2022年3月30日（水）
プレスリリース冊子抜粋

パフォーミングアーツ参加アーティスト一覧

2022年3月30日時点、アルファベット順。

	アーティスト名（グループ名を含む）	生／結成年（没年）	出身／結成地	活動拠点	掲載頁
NEW ○	足立 智美 ADACHI Tomomi	1972	日本	ドイツ	20, 45
NEW	バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre	1991結成	豪州	豪州	44
NEW	ジョン・ケージ John CAGE	1912（1992）	米国	米国	45
NEW	トラジャル・ハレル Trajal HARRELL	—	—	ギリシャ／スイス／米国	43
NEW	今井 智景 IMAI Chikage	1979	日本	日本	46
NEW ○	百瀬 文 MOMOSE Aya	1988	日本	日本	22, 47
NEW	ラビア・ムルエ Rabih MROUÉ	1967	レバノン	ドイツ	48
NEW	中村 蓉 NAKAMURA Yo	1988	日本	日本	46
NEW	スティーヴ・ライヒ Steve REICH	1936	米国	米国	43
NEW ○	塩見 允枝子 SHIOMI Mieko	1938	日本	日本	17, 44
NEW	アピチャッポン・ウィーラセタクン Apichatpong WEERASETHAKUL	1970	タイ	タイ	47

○は現代美術展へも参加。
アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。ただし、出身国や地域の慣習またはアーティスト自身の希望により、姓名順ではない表記も一部あります。
参加アーティストの生没年、出身地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。

現代美術展で展示に付随したパフォーマンスを予定しているアーティスト

シアスター・ゲイツ ▶ p.34

迎 英里子 ▶ p.32

プリンツ・ゴラーム ▶ p.39

笹本 晃 ▶ p.21

現代美術展で展示に付随したVR作品を予定しているアーティスト

ローリー・アンダーソン&黄心健（ホアン・シンチェン） ▶ p.26

荒川 修作 + マドリン・ギンズ ▶ p.24

許家維（シュウ・ジャウェイ） ▶ p.30

※掲載順は公演予定日順。公演日等の詳細は後日発表します。

スティーヴ・ライヒ
Steve Reich

ジュリアード音楽院、ミルズ・カレッジにて音楽を学ぶ。ダリウス・ミヨー、ルチアーノ・ベリオらに師事。それ以前にはコーネル大学にてルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学を学んでいる。1965年テープ作品《イッツ・ゴナ・レイン》、1966年《カム・アウト》発表。1966年より自身のアンサンブルを結成し、世界各国で演奏活動を行う。1991年、自身のアンサンブル「スティーヴ・ライヒ・アンド・ミュージシャンズ」で初来日し、東京と大阪でコンサートを行う。1997年には、複雑なユダヤ教／キリスト教／イスラム教の関係をテーマに据えた『ザ・ケイヴ』を映像作家のベリル・コロットと制作し、東京でも来日公演を行う。音楽というジャンルを超え、広くアートに多大な刺激を与え続ける現代作曲家の一人である。

今回は、《ダブル・セクステット》《ディファレント・トレインズ》を中心に、古代中世の音楽から現代のヴィジュアルアート、コンセプチュアル・アートまで深いつながりのあるライヒの代表作にあらためて光を当てる。彼の作品が有する音楽性と今日性を十全に体感できるコンサートを、ライヒの音楽を敬愛する経験豊富な精鋭演奏家により行う。

2009 《ダブル・セクステット》ピューリッツァー賞（米国）、音楽部門受賞
2006 第18回高松宮殿下記念世界文化賞、音楽部門受賞
1990 《ディファレント・トレインズ》グラミー賞（米国）、最優秀コンテンポラリー・ミュージック賞受賞

Photo: Jeffrey Herman

公演情報
『スティーヴ・ライヒ～スペシャル・コンサート』

出演：中川賢一（ピアノ）
石上真由子（ヴァイオリン）*
福富祥子（チェロ）*
上田希（クラリネット）*
有馬純寿（エレクトロニクス）
山田岳（エレクトリックギター）
早田類（ヴィオラ）
若林かをり（フルート）*
畑中明香（ヴィブラフォン）*
ほか　* = アンサンブル九条山

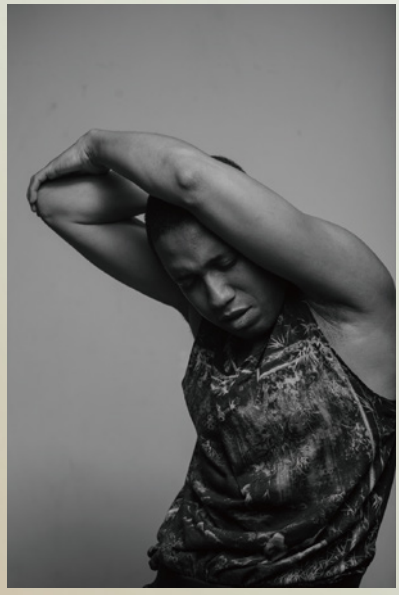
監修：スティーヴ・ライヒ

トラジャル・ハレル
Trajal Harrell

振付家、ダンサー、研究者として、世界の複数の都市を拠点に活動するトラジャル・ハレル。ダンスの歴史、とりわけ1960年代のニューヨークで生まれたポストモダンダンスやヴォーギング*を交差させた独自の振付で、21世紀の舞踊史にあらたな刺激を与え続けている。2019年からはスイスのシャウシュピール劇場のハウスディレクターであり、シャウシュピールダンスアンサンブルの初代演出家である。

そのハレルにとって特別な存在が、舞踏の創始者である土方巽（1928-1986年）だ。2013年より継続してきた舞踏研究とその再解釈が、ついに2022年の最新作『Sister or He Buried the Body』として結実する。私たちは、ハレルが自身の身体と身振りを媒介に「土方巽をヴォーギングする」特別な瞬間に立ち会うことになるはずだ。さらに今回は2019年のソロ作品『Dancer of the Year』とのダブルビル上演を行う。

Photo: Orpheas Emirzas



＊ヴォーギング
1960年代にニューヨークの有色人種とラテン系のLGBTコミュニティから生まれたダンスのスタイル。ファッション誌『VOGUE』に由来し、モデルがランウェイでポーズを決めるように、ポージングの連続と反復で魅せる身振りが特徴的。

2022 『Solo Performance Exhibition』クンストハレ・チューリッヒ、チューリッヒ（スイス）
2020 『Dancer of the Year Shop #3』サンパウロ・ビエンナーレ、サンパウロ（ブラジル）
2017 『Hoochie Koochie』バービカンセンター、ロンドン（英国）
2016 『Caen Amour』アヴィニョン演劇祭、アヴィニョン（フランス）
2013 『Used Abused and Hung Out to Dry』MoMA、ニューヨーク（米国）
2012 『Antigone Sr./Twenty Looks or Paris is Burning at The Judson Church (L)』
ニューヨーク・ダンス・アンド・パフォーマンス・アワード（ベッシー賞）（米国）

バック・トゥ・バック・シアター
Back to Back Theatre

知的障害のある俳優を中心に、30年以上オーストラリアを拠点に活動を続ける劇団。2013年フェスティバル/トーキョー『ガネーシャVS.第三帝国』で初来日。2018年東京芸術劇場主催『スモール・メタル・オブジェクツ』で再来日。社会の闇の部分を鋭く照射する作品は世界的に高い評価を得ている。インクルーシブ・シアターの先駆けであり「息苦しい現代社会」でいかにしたたかに生きることが可能かを常に問い続ける稀有な創作集団が見せるフィクションの力は、私たちへの大きな投げかけとなる。

今回は、最も奇妙な場所で小さな希望を見つけることができた2人のありそうもないヒーローについての物語『ODDLANDS』と『SHADOW』の2本を日本語字幕付きで本邦初公開。さらに、脚本&監督のブルース・グラッドウィンらによるポスト・トークも併せて実施を予定している。

2014　エディンバラ国際フェスティバル、エディンバラ（英国）、ヘラルド・エンジェル批評家賞受賞
2012　ヘルプマン・アワード（豪州）、最優秀オーストラリア作品賞受賞
2008　ニューヨーク・ダンス・アンド・パフォーマンス・アワード（ベッシー賞）（米国）
2005　シドニー・マイヤー・パフォーミング・アーツ・アワード（豪州）、グループ賞受賞

『ODDLANDS』2017
Photo: Jeff Busby

塩見 允枝子
Shiomi Mieko

現代美術展にも参加 ▶ p.17

1961年東京藝術大学楽理科卒業。在学中より級友達と「グループ・音楽」を結成し、テープ音楽の制作や即興演奏を行う。1964年渡米し、フルクサスの活動に参加。1965年スペイシャル・ポエムのシリーズを開始。帰国後は、イヴェントをパフォーマンス・アートとしても発展させる。1970年大阪へ移住。1990年ヴェネチアのフルクサス・フェスティバルに参加したことから、国内外での多数のフルクサスの企画に携わるようになる。1990年代には電子テクノロジーに興味を持ち、パフォーマンスに取り入れる。以後、音楽やパフォーマンス作品の作曲、視覚作品の制作など、活動は多岐にわたる。2014年より京都市立芸術大学・芸術資源研究センター特別招聘研究員。

今回は、1966年から2022年（新作）までのイヴェント作品から、塩見自身が芸術祭のテーマに合わせて上演作品を選び、「詞と概念を演奏する」、及び「ピアノ×パフォーマンス」の2プログラムを上演する。

2014「フルクサス・イン・ジャパン 2014」東京都現代美術館、東京
2013「塩見允枝子とフルクサス」国立国際美術館、大阪
2001「フルクサス裁判」国立国際美術館、大阪
1995　個展「フルクサス・バランス&バランス・ポエム」J&Jドンギュイ画廊、パリ（フランス）
1994『フルクサス・メディア・オペラ』ジーベックホール、神戸
1990　フルクサス・フェスティバル、ヴェネツィア（イタリア）

Photo: 前澤秀登
提供：東京都現代美術館

公演情報
塩見允枝子パフォーマンス作品
『～音と詞と行為の時空～』

出演：植松琢磨　大井卓也　上中あさみ　中村圭介
橋爪皓佐　橋本玲子　森本ゆり　山根明季子

足立 智美
Adachi Tomomi

現代美術展にも参加 ▶ p.20

パフォーマー／作曲家、音響詩人、楽器製作者、視覚芸術家。その多彩なスタイルで知られ、自身の声とエレクトロニクスによる作品、音響詩、即興演奏、現代音楽作品の上演から、サイト・スペシフィックな作曲、器楽作品、技術を持たない人々のための合唱曲などを、テート・モダン（ロンドン、英国）、ハンブルガー・バーンホフ美術館（ベルリン、ドイツ）、ポンピドゥー・センター（パリ、フランス）、ベルリン・ポエジー・フェスティバル（ドイツ）など世界各地で発表している。その作品には自作のインターフェイスから、人工知能、脳波、人工衛星、ツイッター、骨折、超常現象までもが用いられる。

今回は、ジョン・ケージが晩年に取り組んだ『ユーロペラ3&4』を演出する。また音響詩をはじめとするソロ・パフォーマンスを行う。

2021 オペラ『ロミオがジュリエット』文化庁芸術祭、音楽部門大賞受賞（関西参加公演の部）
2019 アルス・エレクトロニカ、リンツ（オーストリア）、優秀賞受賞
2012 DAADベルリン芸術家プログラム招聘
2009 ACCの招聘によりニューヨーク滞在
2007 『ユーロペラ5』（日本初演）演出、サントリーサマーフェスティバル、東京

Courtesy of the artist

公演情報
『ユーロペラ3&4』 ジョン・ケージ公演情報を参照 ▶ p.45

足立智美パフォーマンス
『音響詩ソロ・パフォーマンス』

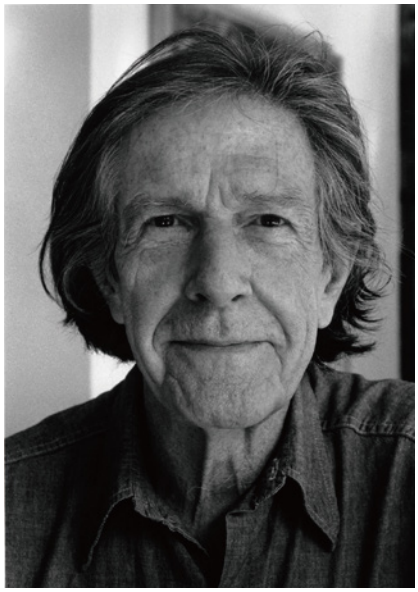
ジョン・ケージ
John Cage

20世紀を代表する作曲家、詩人、思想家、キノコ研究家。マース・カニングハムら舞踊家、マックス・エルンストら美術家、バックミンスター・フラーら思想家・建築家とも深い交流があった。1940年代に禅を学び東洋思想への関心を深める。作曲過程に中国の易経を用いる「チャンス・オペレーション」、演奏や聴取の過程に偶然性が関与する不確定性の音楽を開始し、作曲家が音のコントロールを行わない、偶然性の音楽を確立する。またグランドピアノの弦にゴム・ボルトなどを挟んで音色を打楽器的なものに変化させるプリペアド・ピアノを考案した。

今回は、ケージが晩年に取り組んだ『ユーロペラ』シリーズから、『ユーロペラ3&4』を、足立智美の演出により上演する（日本初演）。『ユーロペラ』は、オペラ歌手の歌、ピアノ、蓄音機、音響、照明などの要素が、コンピューターから出力された乱数に沿って演奏される、ケージの大規模な演劇的作品の代表作。今回、歌手パートのうち2名は能楽師が担当する。

1994-1995（没後）「ローリーホーリーオーバー・サーカス」水戸芸術館、茨城
1989 京都賞（思想・芸術部門）受賞、京都
1987 『ユーロペラ1&2』フランクフルト歌劇場委嘱初演、ドイツ
1952 『4分33秒』マーベリック・コンサートホール、ウッドストック、ニューヨーク（米国）

Photo: Christopher Felver



公演情報
『ユーロペラ3&4』

演出：足立智美
出演：佐野登（能楽師シテ方）　松田若子（能楽師シテ方）　西本真子（ソプラノ）
福原寿美枝（メゾ・ソプラノ）　中井亮一（テノール）　駒田敏章（バリトン）
黒田亜樹（ピアノ）　矢野雄太（ピアノ）　有馬純寿（音響）
中山奈美（照明）

中村 蓉
Nakamura Yo

2000年代より、本格的に活動を開始。映画や小説の名作を独自の解釈でダンス作品として再構築したものも多く、小津安二郎の映画や松本清張の小説『顔』を基にした作品でも注目を浴びる気鋭の振付家兼ダンサー。近藤良平、小野寺修二、室伏鴻らの振付アシスタントも務め、室伏鴻振付『墓場で踊られる熱狂的なダンス』等に出演。ヨーロッパやアジアなどでも公演を重ね、近年ではオペラの振付や演出なども精力的に行っている。

今回上演する『ジゼル』は、言わずと知れた古典バレエの代名詞ともいうべき名作を、今を生きるひとりの女性としてのダンス作品へと昇華させようとする意欲的な試み。
ジゼルとアルブレヒト、そしてヒラリオンの複雑な関係を軸に展開する「愛と生死」をめぐる物語は良く知られているが、中村のそれは、本作に宿るテーマを、極私的な解釈で大胆に再構築し、ヴァージニア・ウルフの詩的テキストなどを引用しつつ、現代人に刺さるソロ・ダンス作品としてユーモラスかつシリアスに踊ってみせる。

中村蓉ソロダンス公演『ジゼル』2021
Photo: 前澤秀登

2021　二期会ニューウェーブ・オペラ劇場『セルセ』めぐろパーシモンホール大ホール、東京
2020　『ジゼル 特別ver.30分版』（映像作品）
2019　『理の行方vol.3 Pendulum』横浜ダンスコレクション青空ダンス、神奈川
2016　第5回エルスール財団新人賞、コンテンポラリーダンス部門受賞
2013　横浜ダンスコレクションEX、審査員賞、シビウ国際演劇祭賞受賞

公演情報
『ジゼル』
振付・出演：中村蓉

今井 智景
Imai Chikage

2002年愛知県立芸術大学作曲科卒業、2009年アムステルダム音楽院修士課程修了。作曲を湯浅譲二、松井昭彦、ウィム・ ヘンドリクス、ファビオ・ニーダー各氏に師事。「音楽におけるベクトル（Vector in music）」を探求し、音楽自身が有機体であることを意識して作曲する。その延長線上に、映像や写真、コンテンポラリーダンス、舞台美術などとの交流を深めた作品が多数あり、演出も手がける。近年では「社会と共存する芸術活動」を追求し、愛知における現代音楽の裾野を広げるレクチャー&コンサートシリーズ「クロスバウンダリー」や現代音楽アカデミーなどの開催、中川運河助成事業ARToC10やあいちトリエンナーレへの参加など地域に根ざす活動を行っている。

今回は、演者がつけてこそ生きるといわれる能面に、現代音楽と写真と映像で息を吹き込むことにチャレンジした《トランセンダント - mirror》を含め、5つの今井作曲作品から構成する舞台作品を上演。豊橋市魚町能楽保存会の協力により400年以上前の能面打師による作品［愛知県指定文化財（一部重要文化財）］に現代芸術家が対峙する。

©Junichi Takahashi / Martin Boverhof

2020《Morphing of Es ist ein Ros' entsprungen》
　アンサンブル・モデルン40周年記念公演作品献呈、フランクフルト（ドイツ）
2016《Masque》今井智景作品個展<HANATSUmiroir定期公演>、ストラスブール（フランス）
2012《towards G》ミュージック・フロム・ジャパン委嘱作品初演、ニューヨーク（米国）
2009《Simulgenesis》第4回アンサンブル・モデルン国際作曲家セミナー参加作品初演、フランクフルト（ドイツ）
2008《Vectorial Projection IV - fireworks》フェスティバル・ドートンヌ委嘱作品初演、パリ（フランス）

公演情報
出演・スタッフ：　マリベス・ディグル（ソプラノ）　江頭摩耶（ヴァイオリン）
畑中明香（打楽器）　稲田優太（映像・オペレーション）
マーティン・ボヴァーホフ（映像）　たかはしじゅんいち（写真）

アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong Weerasethakul

これまで30年にわたり、『ブンミおじさんの森』（2010年カンヌ国際映画祭パルムドール受賞）や最新作『MEMORIA メモリア』（2021年同審査員賞受賞）をはじめ、数々の傑作で人類の映画史を更新し続ける映画監督アピチャッポン・ウィーラセタクン。タイのチェンマイを拠点とする映画制作と並行して、映像インスタレーションやパフォーマンスなどのアート作品も次々と発表し、世界中に静かな熱狂をもたらし続けている。

今回日本のクリエーターたちとの国際共同制作のもと、初のVRパフォーマンスの制作に着手する。目には見えない霊的な存在たちとの交感、眠りや病とともにある身体、宙吊りのまま円環する時間感覚など、あたかもパンデミック後を先取りしてきたかのような彼の映像世界は、VRという技術によってどのように拡張するのだろうか。作曲家・坂本龍一が手がけるサウンドやインタラクティブな光の波動がもたらす新境地に、期待が高まる。

Image photo
Courtesy of Apichatpong Weerasethakul

2019 アルテス・ムンディ、カーディフ（英国）、アルテス・ムンディ8受賞
2015 『フィーバー・ルーム』アジア芸術劇場、広州（韓国）
2013 第11回シャルジャ・ビエンナーレ、シャルジャ（アラブ首長国連邦）、金賞受賞
2012 ドクメンタ（13）、カッセル（ドイツ）
2010 『ブンミおじさんの森』第63回カンヌ国際映画祭、カンヌ（フランス）、パルムドール受賞

百瀬 文
Momose Aya

現代美術展にも参加 ▶ p.22

自他の身体から生まれる違和感やコミュニケーションの不均衡、そこに生じるセクシャリティやジェンダーをめぐる問い、それらを「演じること」を通じて考察する映像やパフォーマンスを制作する百瀬文。近年では「セラピーパフォーマンス」と銘打ち、東洋医学に基づく鍼治療を取り入れたパフォーマンスをはじめ、ケアと演劇的体験が両立する作品も開拓している。

今回、愛知県美術館に収蔵された近年の代表作《Jokanaan》の展示上映に加えて、パフォーミングアーツ部門でも新作を発表する。接触がタブーとなったコロナ禍において、ケアする者とされる者、施術者と患者、健常者と障害者といった、近代的な価値観によって分離された関係を超越し、欲望の根源に触れるセラピー／パフォーマンスの創作を試みる。

《Social Dance》2019
大阪中之島美術館蔵

2021 『鍼を打つ』シアターコモンズ'21、東京
2021 『I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U』パフォーマンスフェスティバルZIPPED、東京
2016 「六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声」森美術館、東京
2015 「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」国立新美術館、東京
2014 個展「サンブルボイス」横浜美術館アートギャラリー1、神奈川

ラビア・ムルエ
Rabih Mroué

レバノン出身で、ベルリンを拠点に活動するアーティスト、ラビア・ムルエ。過去30年にわたり、今日の中東アラブ世界の混迷と歴史の空白を批評するパフォーマンスを発表し続けてきた。共同体の歴史と個人の物語、虚構と現実の境界線上で戯れる作品群は、これまで世界の主要な劇場や美術館、フェスティバルで注目され続け、日本でも2004年以来6度の来日公演を重ねている。

今回「あいち2022」のテーマに応答し、パフォーマンス・アート史を題材にした代表作『Who's Afraid of Representation?（表象を恐れるのはだれ?）』（2005年）を、17年の時を経てアップデート上演する。1960-70年代に花開いたボディアートの自傷的アクションの数々を舞台上に召喚しながら、実際にベイルートで起こった殺人事件を併置することで、西洋視座で編まれ続ける芸術の概念と歴史に水を差す。

『Who's Afraid of Representation?』2005
Photo: Houssam Mchaiemch

2019 『Borborygmus』Home Works Forum 8、ベイルート（レバノン）
2012 ドクメンタ（13）、カッセル（ドイツ）
2009 『フォト・ロマンス』アヴィニョン演劇祭、アヴィニョン（フランス）
2007 『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』東京国際芸術祭、東京
2002 『BIOKHRAPHIA－ビオハラフィア』、ベイルート（レバノン）